

第61回 胃ポリープ

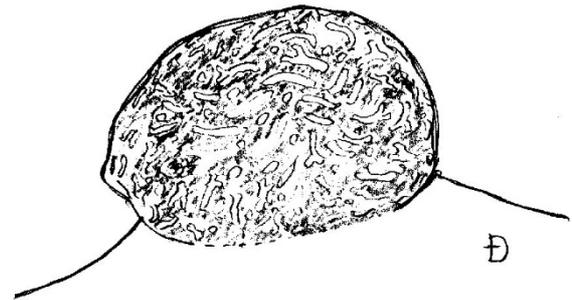
胃内視鏡検査では、しばしば（6%程度）胃ポリープが見つかります。殆どが良性であり経過観察で良いのですが、患者さんからは取らなくて良いのか、今後はどのように対応すればよいのか、とよく質問を頂きます。今回は、胃ポリープの種類や予後についてまとめてみました。

1. 過形成ポリープ（右図）

ヘリコバクター・ピロリ（ピロリ菌）が定着している胃によく見られ、頻度が高いものです。ピロリ菌による胃の炎症が原因で胃粘膜が過剰に再生して発生するとされています。炎症のために充血し、赤っぽい色を呈することが多いです。ピロリ菌を除菌することで、しばしば小さくなったり、消失しますので、ピロリ菌の除菌が必要です。症状は殆どありませんが、稀にポリープ表面の糜爛から出血することがあります。

過形成ポリープでは稀に癌化することがあります（ピロリ菌は胃癌の大きな原因です）。過形成ポリープの癌化のリスクは、ポリープの大きさが1cmを超えると増加するとされています。そのため、0.5cmを超える大きさのポリープは切除する必要があるとされています。

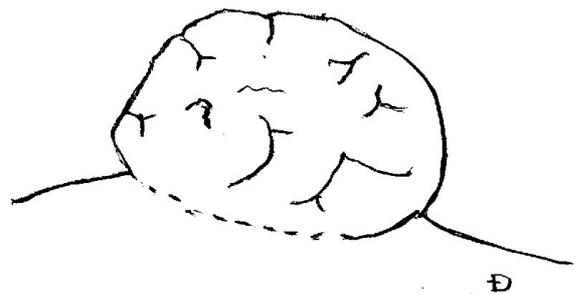
ピロリ菌による萎縮性胃炎の程度が高く、胃癌のリスクが高い場合は、1～2年に1回、胃内視鏡検査で経過を観察する必要があります。



2. 胃底腺ポリープ（右図）

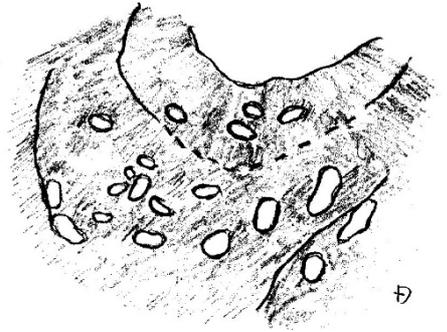
ピロリ菌が感染していない胃にみられることが多いポリープで、頻度が高いものです。プロトンポンプ阻害薬という強力な胃薬を継続使用していると数が増えることが報告されています（プロトンポンプ阻害薬は胃酸の分泌を強力に抑制するため、ガストリン（胃にあるG細胞から分泌される消化管ホルモンで、胃酸の分泌を促す働きがあります）が血液中で増加してしまい、胃底腺ポリープを成長させて

しまいます）。40%程度の方は、複数のポリープがあります。家族性大腸腺腫症（大腸の中にポリープが多数でき、やがて癌化する遺伝性の病気で、若い年齢で大腸がんが発生する）の患者さんでは、この胃底腺ポリープが多発することがあります。胃底腺ポリープは、表面が滑らかで、色は胃粘膜と同じことが多いです。胃底腺ポリープは癌化することは殆どありません。しかし、1cm以上の胃底腺ポリープや、潰瘍化しているポリープは切除する必要があります。また、胃底腺ポリープが20個以上ある場合は、家族性大腸腺腫症などが懸念されるため、大腸内視鏡検査が勧められます。数が少ない胃底腺ポリープは、癌化することが稀なため、経過観察で良いとされています。



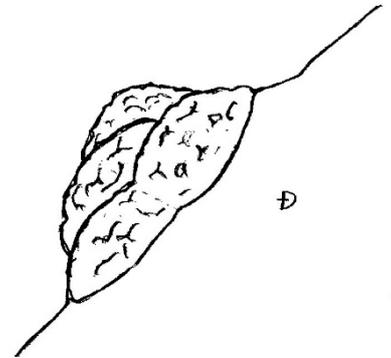
3. 多発性白色扁平隆起（右図）

プロトンポンプ阻害薬使用中やピロリ菌除菌後などに、胃の上部に白色調の扁平な隆起性病変が多発して見られることがあります。組織を見ると胃底腺領域の腺窩上皮の過形成で、炎症細胞の浸潤は伴いません。プロトンポンプ阻害薬の長期内服の結果として血液中のガストリンの上昇が原因ではないかと考えられています。経過観察で良い病変です。



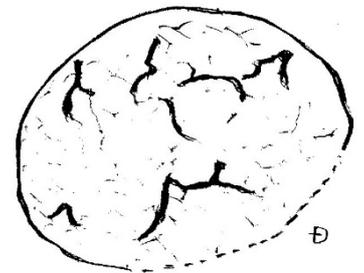
4. 胃腺腫（右図）

慢性胃炎または萎縮性胃炎が原因で発生する、腫瘍性ポリープです。胃ポリープの6～10%を占めます。ふつう無症状ですが、稀に出血することがあります。通常平坦なポリープで2 cm以下のものが多いです。胃腺腫の8～59%に腺腫の中か、他の部位に胃癌が見られるとされています。そのため胃腺腫は切除する必要があります。また、ピロリ菌陽性のことが多いため、ピロリ菌の検査が必要で、陽性であれば除菌します。胃腺腫があった場合は、切除後も定期的な胃内視鏡検査が必要です。



5. 胃神経内分泌腫瘍（胃カルチノイド/右図）

ホルモンやその類似物質を分泌する神経内分泌細胞から発生する腫瘍性ポリープで、稀なものです。病理学的には3つのタイプに分類されます。正常色ないし黄色がかったポリープです。悪性のため、切除する必要があります。切除後も定期的に内視鏡検査が必要です。



6. 非上皮性のポリープ：以下に挙げたものなど、多くの種類があります。

- GIST：GIST（Gastrointestinal Stromal Tumor）は、消化管の粘膜下の筋肉層（固有筋層）に発生する悪性腫瘍で、消化管間質腫瘍とも呼ばれ、まれな病気です。
- 平滑筋腫：胃の平滑筋に由来する良性の腫瘍です。
- 神経鞘腫：胃壁筋層のシュワン細胞から発生する腫瘍で、まれに悪性の報告もあります。
- 異所性腓（右図）：異所性腓（迷入腓）とは、腓臓の組織が腓臓とは別の臓器に紛れ込んでしまうもので、胃や十二指腸などに好発します。しばしばポリープの頂上に「へそ」のようなくぼみが見られます。
- リンパ管腫：リンパ管腫は、リンパ系の局所的の構造異常で、拡張したリンパ管である大小の嚢胞性病変を特徴とする良性腫瘍です。
- 胃のう胞：胃壁内に発生した嚢胞性腫瘍です。内視鏡上では半球状の表面平滑で軟らかい腫瘤として認められ、黄色調の色調が特徴的です。
- 脂肪腫：黄色調の柔らかいポリープで、良性のため経過観察で良いです。
- 胃悪性リンパ腫：リンパ組織に発生する悪性リンパ腫のうち、胃に発生するものです。胃MALT（マルト）リンパ腫（ピロリ菌が原因のことが多い）と、びまん性大細胞型B細胞性リンパ腫が最も多い2つの病型です。



参考文献

UpToDate: gastric polyps(online)

消化管内視鏡診断テキストI（文光堂 2017年）